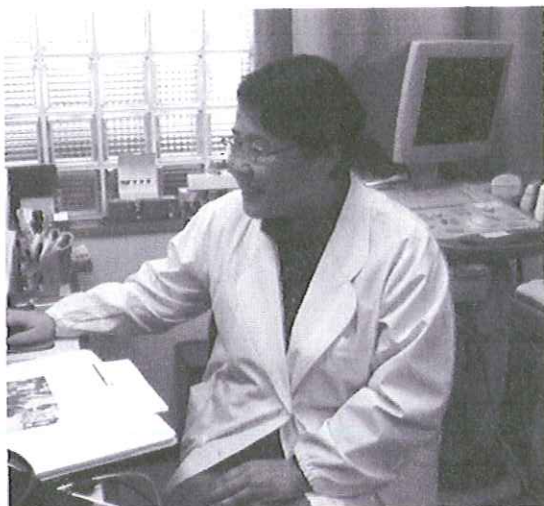
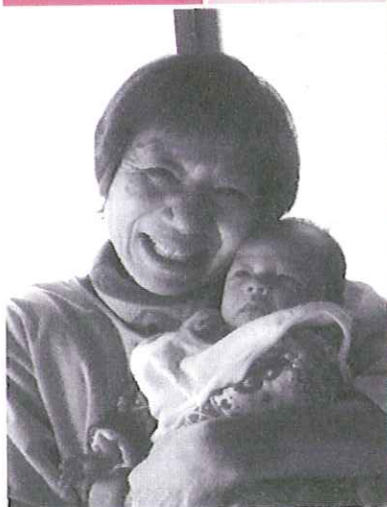


# パステル



特集



## 大田区の「梅ちゃん先生」

～地域で頑張る女性医師～

蒲田の町を舞台に繰り広げられている連続テレビ小説「梅ちゃん先生」。戦後の復興期に「私、医者になる！」と心に決め、みごと医師となつて地域医療に貢献する女性医師の奮闘記です。

その時期から半世紀以上、女性医師たちの現状はどうなっているのでしょうか。

数字で見えてみましょう。まず医学部入学者に占める女性の割合は既に2000年から毎年30%を超えています。医師国家試験合格者の割合でも昨年度で約33%。女性の合格者はここ数年、2500人前後で推移しています。徐々に女性医師は増加していますが、全医師数における女性割合は2010年で約19%に過ぎません。

全国的に医師不足が叫ばれる中、内閣府は、平成22年12月策定の「第3次男女共同参画基本計画」において、医療分野における女性の参画拡大を図るとしました。

### CONTENTS

特集 大田区の「梅ちゃん先生」P1～6

パステルおすすめ本 P3

「エセナおおた」のおすすめ講座 P7

女性のための「たんぼ相談」P8

インフォメーション P8

医療現場での慢性的な長時間労働や当直等の不規則な勤務形態を改善し、生活と仕事の両立が可能な環境への支援促進をうたい、女性医師が育児や介護などを理由に長期休業や離職に迫られることがないように配慮しています。

今回の特集は、男女共同参画社会の実現に向けて、女性医師の勤務環境とその課題を考えてみました。

今日も「梅ちゃん先生」さながら区内で活躍している女性医師や助産師に、その職業選択の動機や仕事へのやりがいなどを伺う中から、今も女性が医療現場で働き続けることの困難な現状が見えてきました。

# 子どもとお母さんの 応援団

しづいこどもクリニック(上池台2丁目)  
小児科医 渋井展子 先生

## 発達障害への支援にも力を注ぐ

小児科医の渋井先生は、小児神経の専門医でもあります。クリニックには3人の臨床心理士がいて、子どももの心や発達についての心配や育児についての相談を受ける、発達心理外来も設けています。また「小児科は子どもとお母さんの2人を診る科」と考え、乳児健診タイムには栄養士にも来てもらい、食育にも関わります。クリニックを「地域での子育て応援団」と自認する渋井先生が今、特に力を注いでいるのは、大田区の発達障害児とお母さんの支援。大田区には就学前の子どもの支援する「こども発達センターわかばの家」しかなく、その後小、中、高校と就労までを支援する施設の必要性を小児科の医師たちと共に訴えています。

田園調布医師会の理事も務め、大田

区が委託する東邦大学医療センター大森病院の「子ども平日準夜間救急」や、荏原病院の「土曜準夜間小児救急」にも参加し、大田区の子どもとお母さんの安心のために、日々奮闘しています。

## 医学部進学を父親が反対

渋井先生が医学部を受験した当時は、女性医師が1割もない時代。医学部進学を父親に「女性として幸せになれない」と反対され、一度は経済学部に進みますが、半年でやはり医師になりたくてこつそり予備校に通い、合格してから父親もやっと賛成してくれたそうです。就職の際も小児科の教授に「5年間結婚しないなら採用」と言われ、29歳まで独身。その後結婚、出産、育児をしながら医師を続けますが、当時は出産休業もたったの14週間。大学院生だった先生は、保育園とベビーシッターの費用に「研修医時代の安いお給料の貯蓄」のほとんどを使いながら仕事と両立したのだとか。困難な時期を共に乗り越えたのが、脳外科医であり、現在は国立がん研究センター副院長でもある夫でした。育児の

大変な時に助け合い、今でもとても仲良しのご様子。

「出産後、自分の親を全面的に頼る女性もいますが、私の場合は父に『母をあてにし過ぎないように』とくぎをさされたので、夫と協力し合い工夫しながら当直や派遣もやり通しました。当時、仕事と家庭のどちらも十分やれていないというジレンマもありましたが、母親も小児科医だった夫に『仕事だけでは90点取るのも難しいけど、仕事と家庭の両方を頑張っているのだから、各70点でも合わせたら140点じゃない！絶対に戦線離脱するな』と言われ、『この人、いいヒトだなあ』と(笑)救われたこともありました」。



しづいこどもクリニック(上池台2丁目)小児科医  
渋井 展子 先生

女性であることを  
活かせる小児科医

夫との二人三脚で育てた娘と息子も成人し、2人とも医療の道へ。今、若い女性医師に聞かれたら「止まらない

いでやっていくことが大事」と答えています。「女性医師は3分の1が独身、3分の1が離婚、4割しか普通に結婚生活が送れていない。家庭との両立は大変ですが、私はできれば女性の楽しさも十分味わう人生の方がいいと思っています。女性であることをハンデイでなく、楽しみながら生きる。一生懸命やる人は周りが自然に応援してくれるはず。パートナーにも協力しようと思わせるフアイトを持つて欲しい」と先生。小児科医の仕事は女性であることが自然に活かせる、とも。今は「受診に訪れるお母さんのお母さんの立場で助言もできるので、50代、60代の小児科医もなかなか素敵。医療に携わる深い喜びをまた新たにしている」そう。

「日本では政治・経済界をはじめ、女性が必要なポストを占める割合が、まだまだ少ない。けれど若い男性の意識が変わりつつあることを、後輩の女性医師や長女の伴侶、患者さんの父親から感じ、頼もしく思っています。これからの日本は女性の活躍なしには成立しないのではないのでしょうか」と先生。まだまだ現役で、大田区の子どもとお母さんを支えて欲しいものです。

## 訪問診療での 優しい目線

染川医院（久が原5丁目）  
内科医 染川実香 先生

「昔前は今日のように医療の専門分化もなく「赤ちゃんからお年寄りまで」を開業医が診ていました。

そんな時代に、両親が大阪で開業しており、夜の診療前には両親と病院職員全員が一堂に会して急いで夕食を取っていた光景を見て育った一人っ子が、成長して職業に医師を選んだのはごく自然のなりゆきかもしれません。

「医師の家でもないのに医師を志し、山奥から大阪に出てきた大正生まれの母が私のモデルでした」。

### ある女性の医師との出会い

医師の資格を取り関西で勤務医に。結婚を契機に関東に移り、内科と心療内科の専門医として国立精神神経センター・国府台病院（※現在は国立国際医療研究センター・国府台病院）などで勤務する染川先生に大きな転機が訪れたのは後継者を

探していた一人の開業医との出会いです。

安達聡路先生の35年に及ぶ医師としての生き方や在宅診療に取り組む姿勢は、母と同じように「女性医師の先駆者」といえました。その姿勢を見てきた染川先生が久が原での開業を決意したのは4年半前。以来、午前を外来、午後はほとんど毎日、何かあったらすぐ飛んでいける範囲内で約30人前後の患者さんを在宅で診ています。「通院が難しい重度の障害や病気や心の問題がある方が多いので気が抜けない部分がありますが、うれしいのは訪問診療の患者さんがリハビリなどで元気になり、通院できるようになったときや、その方のご家族が来てくださるとき。残念ながらそういう方の数は少ないけれども、それはうれしいですね」と患者さんと心身ともに疲れている介護者へも染川先生の目線が届く。



染川医院（久が原5丁目）  
内科医  
染川 実香 先生

### 生活者の視点を獲得

「晩婚で高齢出産だった」と笑う子育ての間、週3日の非常勤をした時期もあり、「プライベートと仕事の両立は一時的にハンディと感ずることもあった」が、その後、自ら母親を在宅介護で看取った6年余りの経験を経て、医者になった当初から目指していた「場所や医療が変わっても患者さん目線と介護者目線を心がける診療」へと自分の診療スタイルが変わったと話す染川先生。

「男性と同等に病院で働き、忙しければそれだけ、『生活者の視点』は獲得しづらいものではあるが、いやおうなしに介護にかかわると、そういう目線がないとできない。それが獲得できたのは仕事とプライベートが自分の中で合体・統合したから」と、今は訪問看護ステーションと連携を取りながら進める地域医療に軸足を置く染川先生。「楽しみ」は読書と中学生の一人娘を誘っての山歩きとか。「女性の生き方働き方の選択肢が広がった今、娘は未来を自由に選択して欲しい」と異業種の夫と話している様子です。

## パステル おすすめ本

女性は自分の身体のメンテナンスを後回しにしがち。身体のサインを見逃さないように！

## 産婦人科医の日記「Dr.半熟卵のつぶやき」

須藤なほみ 虎ノ門病院産婦人科医師 ぜんにち出版

本著は「Dr半熟たまごのつぶやき」というブログを開設し、ブログランキング「医学」部門で連続第一位を獲得、情報をもっと多くの方に伝えたいとの思いから2006年書籍化したものです。女性なら知っておきたい情報、女性外来婦人科の選び方、賢い病院のかかり方、検診のススメ等いまさら聞けないと思うことも優しく解き明かしてくれています。

ぜんにち出版 1,365円



# 区内唯一の助産院

大森助産院 中央7丁目  
助産師 加藤美登利 先生

4月、助産師として夢の実現に向けて  
助産院の看板を掲げました。



大森助産院(中央7丁目) 助産師  
加藤 美登利 先生

いま、妊婦の99%が病院で出産しています。入院期間は正常分娩の場合、初産で5日、2人目からは4日。短くなつたとはいえ、アメリカの36時間、オランダの翌日退院には及びません。しかし日本も昭和30年あたりまでは自宅出産が主流。つまりは即日帰宅。助産師さんの力を借りて、家族が見守る中で赤ちゃんを生みました。

助産師の仕事は  
お母さんに寄り添うこと

加藤さんは25年間総合病院に勤務し、千人以上の赤ちゃんをとりあげてきました。そして最後に勤めた大田区内の病院の産婦人科閉鎖を機に独立。空き家になっていた実家に2009年

そんな加藤さんの夢とは？

妊産婦の多様な想いに応えられる、人と地域に根差した医療への貢献です。「妊産婦の一番のニーズは、妊娠から産後まで見てくれる、自分をよく知ってくれている人が傍らにいて、助産師の仕事は、お母さんに寄り添うこと」と明確です。

そんな大森助産院は、相談から始まって産前の定期健診、自宅または提携病院(24時間以内退院)での出産、産後はヨガや食事指導と体作りまでのカウンセリングを行っています。収入を伺ったら、それは厳しいとの

こと。もともとのニーズが1%、そのうえ35歳以上で初産の人は正常分娩でない場合も多いために助産院の利用ができません。ところが産み方にこだわりを持つ人ほど出産適齢期をキャリア形成に使いがちなので、助産院にとつては年齢のハードルも高いのです。

自宅出産にはどんな利点がある？

「まず、夫が強くなります。母親を支える一番の者が自分だと体で知るからです。出産のときは男の人は本当に強い力を出してくれます。その後、喜びも悲しみもある子育てへの、父親としての覚悟や、子どもとの絆が生まれる瞬間でもありますね」と目を輝かせます。共に子連れ再婚の二人が、新たな子を相談のうえ自宅で産み、出産の過程で、家族が見事に一つになつていった例を語ってくれました。

女性が産むのだから  
医療も女性が支えたい

助産院は、今後もマイナーな存在であり続けるのでしょうか。加藤さんの答えは「否」です。大森助産院の訪問者はほとんどが夫婦。それも女性側が

決断して夫を連れてくるとか。女性が主体的に産み、自分の人生を左右する出産。助産院は、多様な出産ニーズに応える先験的な取り組みとし、存在すると断言されます。病院としっかり提携して異常分娩にも備え、一方、病院側も助産院の存在を尊重する姿勢です。

助産師の資格は、日本では今もって女性のみに与えられています。また助産師は法律に基づき、「女性のためだけではなく、家族や地域社会の中にあつても健康相談や教育に重要な役割を担っていく」ことが期待されています。しかし現行では、助産業務と保健指導業務は分断されがち。主治医のように同じ助産師さんが妊娠から産後までついてくれたら、心強いことは請合いです。

ご自身の子育ては、週3日勤務と夫の協力で乗り切ったそう。企業戦士世代ながら、「夫はジョン・レノンに憧れていたのね。トンチンカンな育児をやっていましたが、それを言つては、ね」と微笑される加藤さんでした。





大田区の

## 「梅ちゃん先生たち」

## 区民の医療を支える 大勢の女性医師たち

東邦大学医療センター大森病院  
(大森西5丁目)

区内最大の総合病院、東邦大学医療センター大森病院では、475人の医師が勤務しています。女性医師はこのうち130人、27%も。女性医師の全国平均19%と比べて格段に多いのは東邦大学医学部の前身が「帝国女子医学薬学専門学校」だからでしょうか。内科、小児科、眼科、皮膚科、産婦人科といった女性の特性を発揮しやすい分野で多く活躍しています。

医療センター大森病院は区の連携拠点病院として、救急医療、夜間診療も行うために、若い医師の当直は月に5〜7回にもなるそうです。しかも当直明けは翌日夜までの36時間勤務。通常勤務が朝7時出勤、夜7、8時退出と聞けば、区民の安心を支えようとこの過酷な勤務をこなしている「梅ちゃん先生たち」に敬服するほかありません。

ちなみに夜間の小児科を覗いてみると、新米ママ・パパたちが不安顔で抱いている赤ちゃんや幼児で、昼間かと思うほどでした。「梅ちゃん先生たち」は、「病院のコンビニ化」と頼もしく言っていたのけました。区では中学生までの医療費を助成。安易に緊急夜間診療に行く傾向はないでしょうか。区内の医療機関は、一次から三次医療機関に分類されていて、それぞれの役割分担が決まっています。初期的な病気であれば「かかりつけ医」の診療所に。ことに乳幼児を持つ家庭は日頃から地域の診療所と相談を密にしたいもの、と考えさせられました。

## キャリアを応援する 東邦大学の女性医師支援システム

さて医師となるためには、大学を卒業し、国家試験に合格して初期研修を行い、その後は、大学で診療をしながら研究に励む、一般病院で臨床に心血を注ぐ、開業医を目指すなど多様な選択肢があります。開業医となっても医学の進歩に合わせた研さんや、大学病院等の高次医療機関との連携が不可欠です。

東邦大学医療センター大森病院の先生たちは、それぞれの目指すところに向かつて病院に勤務しています。ですが女性の場合、出産や子育ての時期には、前述のようにハードな勤務を続けることはできません。やむなく休職、または離職に追い込まれることも少なくありませんでした。その後に復職しても、これまで見てきた「大田区の梅ちゃん先生」のように全力で医療活動に従事する医師は限られ、大半は町のクリニックに週2、3日程度勤める「パート労働」に移ってきたのだとか。それでも収入面では病院での常勤医師を凌いだりするので、大学病院に残って自己研さんを積み、医師として

先端医療を施し患者をサポートするには、よほど強い気持ちが必要。ればやり切れない面もあると言います。

キャリアを応援する  
東邦大学の女性医師支援室

女性医師を取り巻く厳しい状況の中で、東邦大学では、いち早く「女性医師支援室」を設置し、女性医師が働き続けて能力を高め、キャリアアップを目指すことのできる体制を設けてきました。

支援内容は次の通りです。

- ★ベビーシッター・育児支援  
ベビーシッター費用の一部を補助
- ★病時保育室の設置  
生後4か月から小学校低学年までの乳幼児および学童を預かる病児保育室を医療センター内に設置
- ★准修練医制度  
過去の研修歴、勤務歴に照らし、子育て、介護等を果たすための短縮勤務が可能となり、それまで無給であった身分から、常勤として給与が支給され身分が保証されて、その期間も職歴として正式に評価する
- ★男女共同参画臨床研修  
ワークライフバランスに配慮した様々なキャリアパスのプログラムの用意

制度はどう活用されているのでしょうか。「女性医師支援室」室長の片桐由紀子先生(産科婦人科学講座 准教授)に伺いました。



産科婦人科学講座 准教授  
片桐 由紀子 先生

「ワークライフバランスは、それぞれが望む時期に自ら選択できることではありませんが、出産に関しては、年齢は重要な要素です。キャリアアップのために、適当な時期に妊娠を見送るのは望ましいことではないでしょう」と、支援制度の利用を奨めます。

不妊治療における医学の進歩は急速に進んでいるとのことですが、現在の日本の出生児の40人に1人が体外受精と伺えば驚くばかりです。「不妊治療をすれば何歳になっても妊娠出産がかなうと考えるのは誤りです」と片桐先生。

## 支援制度に甘えず 医療分野を支える 人材になる

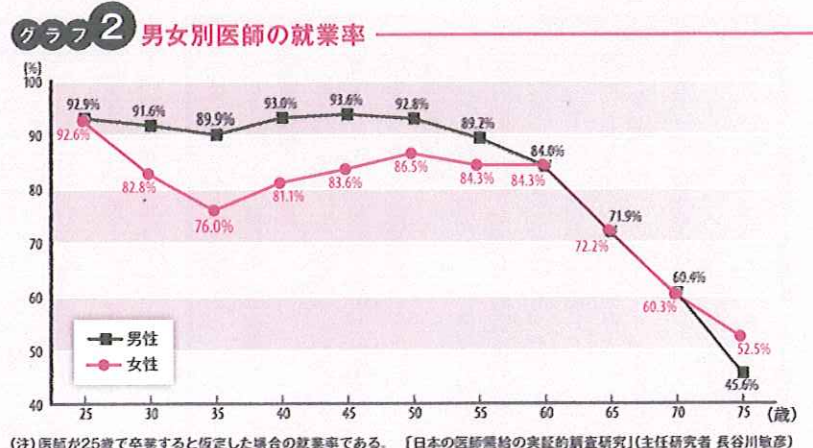
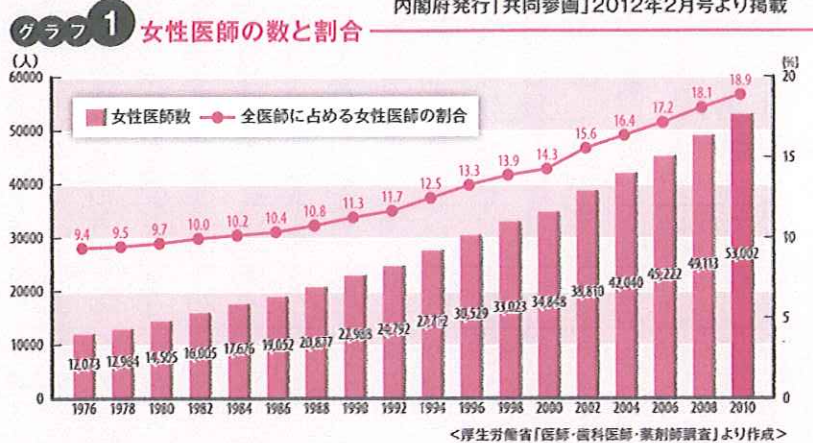
ただし、と先生は続けます。

「女性なら当然の権利として支援制度を利用するのではなく、同僚医師への配慮が必要です。権利を行使するためには果たすべき義務が存在し、やがては自らも支援する側になりその姿を後輩に示すことで、以後に続く女性医師のロールモデルの構築につながるように使ってほしい」と。

実際、出産、育児、介護等の場面で退職してしまった女性医師が、再び医療の現場に戻るには、急速に進歩している医療環境へ適応するための訓練が不可欠。これを補うのが「男女共同参画臨床研修」ですが、途中ブランクの期間によっては、復帰は困難さを伴うようです。

グラフ①に見られるように医師全体に占める女性の割合は2割に満たない状況ですが、女性医師数はここ毎年増加しています。しかし、グラフ②のとおり、大学を出た直後の女性医師の就業率は100%に近いものの、30〜40歳代で就業率は大きく減り、子育て期

内閣府発行「共同参画」2012年2月号より掲載



の医師の仕事と育児の両立の難しさを切実に物語ります。

どれほど就労支援のための施策が用意されたとしても、継続的な就労が進まないとしたら、「その要因の一つには、管理職等指導的立場の受け入れに対する理解が進んでいない可能性があげられる」と片桐先生。「支援内容や利便性が、女性の側に寄り添った現

実的なものであるためには、医療分野における女性の意思決定過程への参画を推進することも必要だ」と言います。

大学病院で言うならば医師としての研さんを積み、さらには講師、准教授、教授といわゆる管理職まで職位を高めるには「梅ちゃん先生たち」の道筋は今もまだまだ険しいのです。

# エセナおおたの おすすめ講座

毎年秋に開催している定番講座  
「男の生き方塾」と「女の生き方塾」  
今後の人生をより豊かに元気に過ごしたい  
中高年の男女向け講座です。

## 「男の生き方塾」

対象は50歳以上の男性。内容は健康管理、食事の支度、介護、パートナーとの関係作りなど多岐にわたります。

昨年は「男による男のための地域デビュー応援講座」と題して、6回にわたり講座を実施しました。

この講座の企画運営は、「男の生き方塾」を受講した卒業生が作ったサークル「サードエイジサロン」が担っています。いつまでも健康でいたい、地域や人の役に立ちたいという思いのもと、数カ月かけて企画を練っています。今では、その活動は「エセナおおた」を飛び出し、キッズな大森や池上長寿苑など区内各地で講座を実施、活躍を広げています。

これまでひたすら働いてきた男性に「ここで男のヨロイを脱いで力を抜いてみてもいいんじゃない？」って先輩男性が身をもって気づかせてくれる講座です。

## 「女の生き方塾」

対象は50歳以上の女性。講座名は「もうひと花咲かせるための女の生き方塾」。毎年人気の講座です。

子どもの頃は親に従い、結婚後は夫に従ってきた女性が、自分で考え行動し責任を果たすことの重要性を学び、精神的な自立を促す目的の講座です。内容は介護やパートナーとの関係作りなど。昨年はお金と生活設計の話も取り入れて好評でした。同じ時代を生きてきた女性同士で、これまでの生き方を振り返りながら、文字通り「もうひと花咲かせよう」と思ってもらえる講座です。

今年は、大田区全域へアピールする一環として、会場を「エセナおおた」ではなく、他の区施設で開催する予定です。



募集案内は、区報・区設掲示板・「エセナおおた」ホームページ等でお知らせします。

詳しくは、裏面をご覧ください。ぜひ楽しみに！

